

## 愛国

田中 愛子

以前このコラムで「地面師」に触れたことがある。「地面」も「師」も悪い意味はないのに、二つが付いて「地面師」となると途端に得体のしれない怪しげな人物の姿が浮かんでくる。こんなふうに、一つ一つはいいことばなのに、二つ合わせるとイメージが変わってしまうものがある。

軽やかな「愛」と「国」とがむすびあひ「愛国」といふ重い憂鬱  
水辺あお「コスモス」2021年5月号

「愛」も「国」も軽やかなイメージがあるのに、その二つが結び付いて「愛国」となるとなんだか重くなってしまうと詠う。ことばはそれぞれに意味を持つが、それとは別に感覚的な印象、情緒的なイメージといったものがある。いろんな経緯でそのことばについていくものなのだろう。たとえばこの歌に登場する愛、国、愛国のように、それぞれのことばが意味のほかにも感覚に働きかけるイメージを持っている。

また、二つのことばを合わせると、新しく内容が加わっ

たり特定の意味になったりすることもある。「買う」と「食う」とで「買い食い」。買い食いというと、ただ買って食べるという意味ではなく、学校帰りの子どもたちがお店でなにか買って楽しそうに食べているイメージがある。広辞苑でも、「子供が菓子などを自分で買って食べる」と書いてある。「どろぼう」と「猫」なら「どろぼう猫」と書いてある。お魚をくわえて逃げる猫より、よその男性と懇ろな関係になってしまふ女性が思いうかぶ。広辞苑には隠れて悪事を働く者であるが、その代表格か。「立ち聞き」もそう。単に立って聞くのではなく、地位や名譽のある方のお宅で、家政婦さんがドア越しに秘密をこっそり聞いてしまう。そんなドラマがあったような…。

さらに、「踏む」、「蹴る」というと、それだけなら私が何かを踏むとか蹴るとかする感じだけれど、「踏んだり蹴ったり」となると、急に立場が変わって、踏んだり蹴ったりする側から踏まれて蹴られる側になってしまふ。「踏んだり蹴ったり」は、感覚的にはむしろ「踏まれたり蹴られたり」というべきではないかとも思う。

さがせばそんなことばがたくさんあるかもしれない。このたくさんは「いっぱい」ともいうけれど、これも二つ重なる。「いっぱいいっぱい」となると、仕事や生活の重みでつぶされそうあつぷあつぷの状態、そんな意味になっ